

学校としての大学、職
場としての大学
はじめて大学教員とし
て採用され、給料をもら
う立場になった時のこと
について、どんな思い出
業ではリベラルな言説を
唱える先生が意外と保守
的だったり、その反対も
あったりすることを知ら
ず、たまたま同じ組織の
助手に採用された。30年
近く前のことである。9
月30日まで大学院生で、
10月1日から「センセ
イ」になったのだが、周
りの風景は何一つ変化し
なかった。しばらく経つ
と、「学校としての大
学」と「職場としての大
学」は、実はかなり異な
るのだということに気づ
き始めた。

それまでの指導教授は
直属の上司となり、講座
の資料室に仮住まいする
形で研究室を与えられ
た。時おり、生命保険や
書店の営業担当者が飛び
込んできて、何も知らな
い青二才の私を「先生、
先生」とヨイショした。
過ぎない。親きょうだい

をはじめとする世間の人
々の私に接する態度も、
「すねかじりの学生」か
「大学の先生」へと天
きく変化した。
プレFDの限界
同じ建物内で、一夜に
して立場だけ変わった筆
者にしてこうである。ま
た、研究大学の大学院
生として研究室の活動や
博士論文を仕上げること
に集中してきた日々か
ら、まったく異なるタイ

を始める。考える。
第一に、大学院生には
学内で教育実践する機会
が限られているので、
「量の上の水練」になっ
てしまおうという点であ
る。各大学にはTAや上
級TAのポストが設けら
れているが、単独で教壇
に立つことは難しい。大
学の授業とは、シラバス
の授業とは、どこからが一
入力に始まり、LMSに
コンテンツを入力し、全
て、多岐にわたる職務の
多くは学生には見えにく
い。たとえば、学内委員
会の運営、カリキュラム
の見直し、入試問題の作
成、科研費の申請、地域
連携事業、学会の雑用、
学会誌の査読、各種の学
位審査など、枚挙に暇が
ない。どこまでが勤務校
の仕事を、どこからが一
研究者としての職務なの
か、境界性がはつきりし
ない偶然性が大きく左右
している。

プレFDの限界
同じ建物内で、一夜に
して立場だけ変わった筆
者にしてこうである。ま
た、研究大学の大学院
生として研究室の活動や
博士論文を仕上げること
に集中してきた日々か
ら、まったく異なるタイ

プレFDの限界
同じ建物内で、一夜に
して立場だけ変わった筆
者にしてこうである。ま
た、研究大学の大学院
生として研究室の活動や
博士論文を仕上げること
に集中してきた日々か
ら、まったく異なるタイ

プレFDの限界
同じ建物内で、一夜に
して立場だけ変わった筆
者にしてこうである。ま
た、研究大学の大学院
生として研究室の活動や
博士論文を仕上げること
に集中してきた日々か
ら、まったく異なるタイ

プレFDの限界
同じ建物内で、一夜に
して立場だけ変わった筆
者にしてこうである。ま
た、研究大学の大学院
生として研究室の活動や
博士論文を仕上げること
に集中してきた日々か
ら、まったく異なるタイ

プレFDの限界
同じ建物内で、一夜に
して立場だけ変わった筆
者にしてこうである。ま
た、研究大学の大学院
生として研究室の活動や
博士論文を仕上げること
に集中してきた日々か
ら、まったく異なるタイ

プレFDの限界
同じ建物内で、一夜に
して立場だけ変わった筆
者にしてこうである。ま
た、研究大学の大学院
生として研究室の活動や
博士論文を仕上げること
に集中してきた日々か
ら、まったく異なるタイ

プレFDの限界
同じ建物内で、一夜に
して立場だけ変わった筆
者にしてこうである。ま
た、研究大学の大学院
生として研究室の活動や
博士論文を仕上げること
に集中してきた日々か
ら、まったく異なるタイ



かわいい子には旅をさせよ

「大学教員インターンシップ」の試み

回にわたってコンスタン
プの大学の教員として採
用される場合の環境変化
の大きさは比較にならない
だろう。日本では大学
院生が大学教授や授業
設計の基本を学び、模擬
授業等を体験するプレFD
Dの機会が増えつつあ
る。では、こうした研修
を実施すれば、大学院生
はスムーズに大学教員に
移行できるだろうか。筆
者はそう単純ではないと
考える。

第二に、大学教員の職
務は多岐にわたり、授業
によってさまざまな
課題に直面してきた。そ
こで、2021年度末か
ら「大学教員インターン
シップ」という仕組みを
試行している。

これは、神戸大学の
大学院生のうち、プレFD
前ミーティングを行い、
研修日程や内容をオータ
ーモードで作成し、研修
後には同じく三者で事後
ミーティングを実施して
いる。

研修生は受け入れ大学
の授業でのゲストスピー
カー、模擬授業、フィー
ルドワーク、就職活動の
面接指導、オープンキャ
ンパスや事務局の見学、
学生ボランティア団体へ
の活動参加など、さまざま
な活動に参加する機会
を得た。研修生はふだん
神戸大学の研究室にいら
るだけでは体験できなかった
活動を通過して、さまざま
な気づきを得られたよ
うだ。

具体的には、大学教員
として働く上で研究業績
がすべてではないこと、
学生とのコミュニケーション
のとり方は複雑で多
様なこと、個人の人生と
いう視点から大学教員と
いう存在をどう捉え直すこ
と(家庭のある女性がか
つてはそれなりの負担と
労力を要するため、現在
は神戸大学の修士生の厚
意に頼って運用してい
る。受け入れ側にとつて
も一定のインセンティブ
を工夫する必要がある。
第4は、送り出す側の
学内事情である。神戸大
学では博士課程の学生の
民間企業への就職を促す
取組がキャリア部門で行
われているのだが、この
大学教員インターンシッ
プのようなアカデミック
な就職支援を学内でどう
統合するかという問題が
残されている。

神戸大学教授 近田政博